中　臣　遺　跡

―文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要―

１９７９年度

京　都　市　文　化　観　光　局
財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

例　　言

1　本書は、京都市文化観光局文化財保護課の委託により、文化庁国庫補助を得て行なった中臣遺跡の昭和54年度発掘調査の概要である。

2　発掘調査の主体は、財団法人、京都市埋蔵文化財研究所である。

3　調査個所は次の通りである。

1)　15次Ⅱ　勧修寺西金ケ崎22－1・32－1

2)　20次　勧修寺西金ケ崎10－1

3)　21次　椥ノ辻番所ケ口町26－1・26－2・27－1

4)　22次　勧修寺東栗栖野町46

5)　24次　勧修寺西金ケ崎22－4

6)　25次　椥ノ辻番所ケ口町保留地49－1

7)　26次　椥ノ辻番所ケ口町20

8)　28次　勧修寺西金ケ崎35

9)　32次　椥ノ辻番所ケ口町27－2

目　　次

Ⅰ　15次Ⅱ調査

1 調査経過……1

2 遺構・遺物……1

3 小結……1

Ⅱ　20次調査

1 調査経過……2

2 遺構・遺物……2

3 小結……7

Ⅲ　21次調査

1 調査経過……8

2 遺構・遺物……8

3 小結……10

Ⅵ　22次調査

1 調査経過……10

2 遺構・遺物……11

3 小結……11

Ⅴ　24次調査

1 調査経過……11

2 小結……11

Ⅵ　25次調査

1 調査経過……12

2 遺構・遺物……12

3 小結……12

Ⅶ　26次調査
1 調査経過……12
2 遺構・遺物……13
3 小結……13
Ⅷ　28次調査
1 調査経過……14
2 遺構・遺物……14
3 小結……14
Ⅸ　32次調査
1 調査経過……16
2 遺構・遺物……16
3 小結……17
Ⅹ　おわりに……18

図版目次

一遺跡　1．航空写真（1977年撮影）
2．航空写真（1978年撮影）
二遺跡　1．15次Ⅱ調査区全景
2．22次調査区全景
三遺跡　1．20次西部住居址群
四遺跡　1．2号住居址
2．4号住居址
五遺跡　1．3号住居址
2．4号住居址
六遺跡　1．9号住居址
2．9号住居址完掘状況
七遺跡　1．8号住居址土器出土状況
2．8号住居址貯蔵穴
3．10号住居址土器出土状況
八遺物　8号住居址出土遺物
九遺物　10号住居址出土遺物
十遺跡　21次調査区全景
十一遺跡　1．21次調査　北壁断面
2．SB－3
十二遺跡　1．13号住居址
2．24次調査区全景
十三遺跡　1．25次調査区全景
2．26次調査区全景
十四遺跡　1．28次調査区全景
2．14号住居址カマド
十五遺跡　1．32次調査区全景
2．東壁断面
十六遺跡　調査位置図
十七遺跡　20次調査区全体図
十八遺跡　20次調査西部住居址群
十九遺跡　20次調査8号9号住居址
二十遺跡　21次・25次・26次・32次調査区
二十一遺跡　21次調査・13号住居址
二十二遺跡　22次調査区平板図
二十三遺跡　28次調査区平板図
二十四遺跡　28次調査区平面図

挿図目次

図1　15次Ⅱ・24次調査区
図2　14号住居址カマド
図3　32次調査　平面図・断面図

Ⅰ　15次Ⅱ調査（図版二－１）

１　調査経過

1978年度調査第15次調査地点の敷地拡張に伴う発掘調査である。第15次調査では東西6.8m、南北７mの規模を有する方形周溝墓と考えられる溝状遺構が検出されている。時期は弥生終末期であろう。また、調査区西に接する土地区画整理道路15号線においても同時期に比定される溝が検出されており（1976年度調査）、今回調査地点はその溝の東延長部分に位置する。

調査地点の現状は水田であるが上記したように前年度調査地域にはすでに造成が行なわれているため、部分的に今回調査地点に土砂が盛られており、調査は15号道路検出溝の延長部分にとどまった。

基本層位は下記の通りである。

第１層　耕土

第２層　灰褐色砂泥

第３層　暗褐色泥砂

第４層　黄褐色粘土

第２層は土地区画整理以前の耕土である。基本的な層位は前年度調査地区と変っていない。地山と考えられる第４層黄褐色粘土は、フラットな面をなしている。

２　遺構・遺物

検出された遺構は調査区西端において溝状遺構を検出しただけである。巾90cm、長さ1.８mにわたって検出された東西溝である。遺物は出土していない。

３　小　結

今回の調査は範囲が狭いため詳細は不明であるが、検出された溝状遺構は1976年度調査の際検出された溝の続きと推定される。1976年度調査結果と合わせて今回検出された溝がどのような性格の溝であるか定かでないが、前年度調査地点の溝が方形周溝墓であることは明確であり、1976年度、そして今回の溝が方形周溝墓推定されるならば、中臣遺跡西南部に位置する本調査区周辺は弥生時代終末期の墓域と考えられる。

Ⅱ　20次調査（図版三～九・十七～十九）

1　調査経過

調査地は栗柄野丘陵の南方に位置し、旧安祥寺川の北20m河岸段丘上の水田内である。これまでの中臣遺跡の範囲のうちでも南端の部分である。近年調査地の南側に住宅が数軒建ち並ぶようになったが、栗柄野丘陵をとり囲むこの一帯は水田として利用されていた。調査地は北から南へゆるく傾斜している。山科南部では土地区画整理が実施され、既に市街化道路が新たに作られてきた。調査地付近でも数本水田の中を道路ができ、その折に道路の部分だけ発掘調査が行なわれてきた。その際に住居址・掘立柱等の遺構及び遺物が発見されている。調査地の北方20mにある東西そして南北にのびる道路では、弥生時代後期から古墳時代後期までの住居址が35軒検出された。そのため集落が南側はどこまで広がっているかが今回の調査の問題点であった。しかしながら旧安祥寺川に接近しているために河川の氾濫が予想された。

調査地の基本的層序は上から暗灰色泥土（耕土）・黄褐色砂泥層（床土）・暗黄灰色砂泥層（旧耕土）・明黄褐色砂泥層（旧床土）・茶灰色砂泥層・茶褐色砂泥層・黄褐色砂泥層の順に堆積している。土層は南へ若干変化し、地山が北から南へ傾斜しているため南部が深い。しかし土器の包含層（茶灰色砂泥層）は北部が厚くなっていて、遺跡の中心が北方にあることを予想させる。明黄褐色砂泥層（床土）をはがし、茶灰色砂泥層（包含層）の上面で、暗渠の溝が2本東西に走っているのが見つかる。遺物は小片で時期の決定が難しいが、近代のものであろう。そしてトレンチの北西で近代の野つぼを1基、不定形の土壙が3基検出された。土壙は灰色の砂礫が埋土であるが遺物は無く、時期と性格は不明である。その下の茶灰色砂泥層（包含層）を掘り下げていく段階で遺物が出土した。6世紀末期の須恵器少数・古式土師器片多量・銅鏃1個・鉄鏃3個等が含まれている。この層は5cm程の単位で掘り下げたが遺構は検出されず、完全に取り去った時点、茶褐色砂泥層の上面で発見された。それらの遺構は竪穴住居址10戸（7戸が切り合っている、1号住居址～10号住居址）・溝状の遺構2本・土壙3基が見つかった。茶褐色砂泥層をはがして黄褐色砂泥層の上面では溝状遺構1本・土壙7基そして多数のピットが検出された。ピットは規則性は認められない。

2　遺構・遺物

ー1号住居址ー

調査地の北西部に位置し、平面形は隅丸方形を呈している。住居址の東西の長さは5.2mであるが、北半分を2号住居址と10号住居址に切られているため、南北の長さは不明である。北端を調査地外にはみだしている。床面は部分的にかたい面があるが、はり床は行なっていない。床面までの深さは11～14cmである。壁溝の幅は15～20cmで深さ5～6cmである。2号住居址と10号住居址に切られて、床面まで削平されているため北側は残っていない。柱穴は4本検出し、径が26～32cm・深さ40cm程度のものである。柱間隔は東西3.2mと2.65m、南北2.2mと2.25mとなっておりやや台形をなす。炉及び貯蔵穴は確認されなかったが、南辺中央に断面台形で砂礫を盛り上げたU字状のものが検出された。幅は20～30cm程で高さが7cmあり帯状にU字を形どる。内側には径45cm・深さ8cmのピットが2つ横に並んでいる。U字の先端を10号住居址の壁溝にわずかであるが削られている。用途は不明であるが、何かの工作用の施設であるかも知れない。

遺物は小片ばかり少量で復元可能な土器は出土していない。鉄鏃が1本出土した。

1号住居址は切合い関係を見ると、同規模・同平面形の4号住居址と共に最も古い住居址であろう。

－2号住居址－　　（図版四－1・十八）

調査地の北西部に位置し、北東コーナー部分を除き全掘した。近代の野つぼに北西コーナーを切られる。この住居址は、1号住居址・3号住居址・10号住居址を壊わして作られている。

平面形は隅が直角をなす方形で、東西6.8m、南北6.1mの規模をもつ比較的大型の住居址である。柱と柱で囲まれた中心部分は、かたくしまった床面を形成しているが、それより外側は内側に比べてやわらかい。住居址内の生活時にふみかためられた事を示している。床面までの深さは12～13cmとやや浅いので、少々削られているかも知れない。壁溝は全周しており、幅20～25cm、深さ40～50cmである。柱穴は4基で、径30～40cm、深さ40～50cmの大きさのピットである。柱間隔は東西が3.05cmと3.1m・南北が3.05mと2.9mとなっている。中心部付近の床面上に焼土があり炭も散らばっているため炉跡と考えられる。焼土は30cm×40cm程度の大きさである。貯蔵穴は検出されなかった。その他に床面で砂礫をたたきしめた様なところが、北東コーナーと南辺中央のものは出入口の痕跡かも知れない。

遺物は少量で床面に原位置を保つものは無いが、30cm×40cmの大きさのたたき石が床面に置れた状態で出土した。その他に鉄鏃4本と用途不明の鉄器が1つ出土した。

ー３号住居址址　　（図版五ー１・十八）

西部中央に位置し２号住居址に切られ４号住居址を切っている。南半は削平が激しい。

平面は隅丸方形を程し、東西5.4m、南北5.3mの規模をもつ。床面は南西部が地山の砂礫層があらわれている以外はかたくしまっている。床面の深さは12～15cmで北東隅の上面に土器片が散乱している。壁溝は20～25cm、深さ５cmで全周している。柱穴は径が25cm、深さが20cm程で４基検出された。柱間隔は東西が北側と南側も2.7mで南北が2.85mと2.9mの長さである。その他に４号住居址との関係は不明であるが、住居址の軸線と平行するピット群（４個）を検出した。住居址の中心に炭と焼土の入った浅いピット（径40cm・深さ19cm）が検出されたが、炉の痕跡であろう。南辺中央には土壙（長径75cm、短径40cm・深さ12cm）が発見されたが、貯蔵穴にしては浅すぎるようである。その土壙に接してたたき石が床面に座っている。

遺物としては、甕・壺・高杯等の破片が北東床面に散乱した状態で出土している。

ー４号住居址ー　　（図版四ー２・十八）

トレンチの西部中央で検出された。３号住居址と５号住居址に切られ、６号住居址を切る。南部の大半を５号住居址に壊されている。

平面形は隅丸方形を程し、東西4.8mで南北4.7mの大きさをもつ。他の住居址に壊されていない部分は床面が残っているが、礫が多く含まれている。床面までの深さは15cmである。壁溝は幅12～18cmで深さ５～６cmで、３号住居址に切られている部分は溝の底だけが確認された。柱穴は４本柱となっており、径が25cm～35cm、深さ30cm程度である。柱間隔は東西2.4mと2.35m、南北2.3mと2.35mである。貯蔵穴は確認されていない。炉の存在は不明であるが、焼土は北辺と東側に多量に検出されている。炭は少量なので火災のためとは思われない。出土遺物は小片のみである。

ー５号住居址ー

南西部に位置し南西隅を調査地外にはみだし、４号住居址と６号住居址を切っている。

平面形は方形で、大きさは東西が5.5m、南北が5.65mとなっている。はり床を行なった形跡は認められず、砂礫が露出しているが、床の上面には焼土と炭が散らばっている。最も残りの良好なところで床面までの深さは12cmあるが削平が激しい。幅20cm、深さ３cmの壁溝が住居址を全周している。柱穴は４基で径が26～30cm、深さは50cm程度である。柱間隔は東西が2.7mと2.9m・南北が両方とも2.7mとなっている。中心部に炉跡らしき焼土と炭のかたまりを検出した。東北コーナーに径70cm・深さ15cmの土壙を検出したが、貯蔵穴

の可能性がある。土壙の北壁に甕の破片がはりついた状態で出土した。出土遺物は小量である。

－６号住居址－

調査地の西西角に位置し、もっとも西よりの住居址である。北西隅と南部を調査地外にはみだしている。４号住居址と５号住居址に切られ、全体的に耕作時による削平が激しく残りが良くない。

平面形は方形を程し、東西が6.2mで南北が6.15mの大きさをもつ。５号住居址とほぼ重なり合い大部分の床面は削られてしまっている。南西部の壊されていない床面も、明僚な床ではないが、上面に木炭が散乱していた。壁溝の底の部分だけが検出され、幅18～22cm、深さ５cm程の溝である。柱穴は３基検出し、南西の柱穴が確認できなかった。柱穴は径が24～30cmで深さが40cmとなっている。柱間隔は東西3.15m、南北3.35mである。炉と貯蔵穴の有無は不明。遺物は土器片が小量と鉄鏃が１本出土した。

－７号住居址－

調査地の北西部に位置しているが、大半を調査地外にはみだし、南辺のみを調査した。調査地内では他の住居址との切り合いは無い。

平面形は隅丸方形を程し、東西の長さが4.6mである。床面は不明僚ではり床は認められない。床面までの深さは15～20cmである。壁溝の幅は22cmあり深さが７cmで、底に小ピット（径６cm）を検出した。柱穴は南西の部分だけ見つけた。径が24cmで深さが31cmとなっている。土層の推積は上から灰褐色泥砂、暗灰色砂泥で壁溝内が淡灰色泥砂となっている。炉と貯蔵穴は不明である。遺物は小量であるがほぼ完型の小型の壺が出土している。

－８号住居址－　　（図版五－２・七－１・２・八・十九）

トレンチの中央部北端に位置し、北東角をわずかに調査地外にはみだしている。他の住居址との切り合い関係は無いが、同時代の溝（ＳＤ－３）に南西角の上面を切られる。平面形は隅丸方形を程し、規模は東西5.1mと南北5.15mの大きさである。床面ははり床を行なっており、かたくしまっている。特に柱に囲まれた部分がかたい面をなしている。床の上面では完型の土器とたたき石が見つかっている。床面までの深さは15～24cmである。巾22cmで深さ４～６cmの壁溝が周囲をとりまく。壁溝内では、東辺を除いて小ピット（径５～６cm）が多数検出された。東辺以外のところではベースが黄褐色砂泥層でピットが見つけられやすかったが、東辺付近のベースは砂礫層となっており、検出が困難であったためと思われる。小ピット群はおそらく全周していたであろう。柱穴は４基検出され、径24～

26cm・深さ40cm程度のものである。柱間隔は東西2.45m・2.55m西北2.45・2.5mとなっている。覆土の堆積は上から暗褐灰色砂泥層・褐灰色泥砂層・淡褐灰色泥砂層（まり床）・黄灰色泥砂（壁溝）である。住居址の中心部には浅いピット（径30cm・深さ10cm）が発見され、内と付近に焼土が認められるために、このピットは炉として使用された可能性がある。その他に貯蔵穴と思われる土壙が南近中央で検出された。大きさは20cm×80cmで深さが20cmとなっており、土壙の西肩に白色粘土のかたまり（径20～30cm）数個と土器片がはりついている状態で見つかった。

出土遺物は完型品が3個体（壺）あり、他にも甕・壺・高坏・器台等の土器が多量に出土している。完型品とたたき石が床面に置れている。

土器の出土状況をみると、北東隅にこわれた土器がかたまっており上層から検出されたものと完型の土器で床の上面に座って出土したものと2通りある。後者は使用時の原位置を保っていると思われるが、前者は住居址の廃絶後に棄てられたものであろう。貯蔵穴で見つかった粘土は両手でかためたような大きさであり、土器製作用の粘土を貯蔵した可能性がある。

－9号住居址－　　（図版六・十九）

この住居址は東部中央に位置しており、全掘することができた。軸線は他の住居址と異なりほぼ南北である。住居址との切り合いは無いがＳＤ－4に切られる。

平面形は隅丸方形を程し、東西5.0m南北5.3mの規模をもつ。床面ははり床を行ないかたくしまっている。床面までの深さは20～25cmである。壁溝は巾が24～28cmで深さが5～7cmとなっており全周している。壁溝内で部分的ではあるが小ピットが認められた。柱穴は4本柱で径40cm深さ40～45cmであるが北東の柱穴の堀り方は不明。柱間隔は東西が2.3mと2.25m・南北が2.5mと2.5mである。伏土の堆積は上から暗茶褐色砂泥層・暗茶褐色砂泥層（他山の黄色砂泥が混入）・黄褐色砂泥層（はり床）・茶褐色砂泥（壁溝）の順である。住居址の東部に径30cmの焼土を床面で検出し、炉跡の可能性がある。貯蔵穴は見つからなかった。南西コーナーに径が10cmの小石がかたまって出土した。小石は壁溝の上にかたまっているが目的は不明である。北近の中央がややふくらんでいるがおそらく崩壊したためであろう。床面をはがした状態で下から巾70cmの溝が壁に沿って一周していることが判明した。深さは一定せず、深いところで床面から30cm、浅いところで8cmである。

遺構の残存状態は良好であるが、出土遺物は少量で小さな土器ばかりである。

－10号住居址－　　（図版七－2）

西部の北端に位置し、北半分を調査地外にはみだすため未調査である。2号住居址に切られ1号住居址を切る。この住居址は1号と2号の中に入っているため、検出が困難であった。

平面形は隅丸方形を程しているがややいびつである。東西の長さが6.6mと今回調査した住居址の中で最も規模の大きいものである。南北の長さは不明である。2号住居址に切られている部分では床面が削られているが、1号住居址のところではり床らしい面を検出した。床面までの深さは最も残りの良いところで22cmである。2号住居址に削られている個所の壁溝はわずかに底の部分だけ検出した。壁溝は巾12～22cm深さ5～8cmである。柱穴は2本検出し、径26cmと30cm・深さ40cm程度となっている。柱間隔は3.35mである。炉は確認されなかった。貯蔵穴と考えられる土壙が南辺中央で検出され、一部を2号住居址の壁溝に削られている。一辺が95cmの正方形で深さが35cmである。土壙内からは何も検出されなかったが、覆土からは多くの土器片が出土した。

遺物は床面で検出されたものは少なく、伏土内で貯蔵穴の上と東隅から多量に出土した。壺・甕・器台・高杯等の器種がある。土器片は2個所にかたまっており、住居址の上層から出土しているため、住居の廃絶後投棄されたものと考えられる。

ーその他の遺構ー

住居址と同時代の溝が3本検出された（SD－3・4・5）。SD－3は7号住居址付近から南東方向へ流れる溝で、巾60～70cm深さ5cmである。SD－4とSD－5は溝状の遺構で続かないものである。SD－4は9号住居址を切って作られ、L字型の堀り方である。（巾40cm深さ30cm）底に径8cmの浅いくぼみが数個あり、杭跡と考えられる。

調査地の中央に土壙（SX－1・規模2.8—2.2m深さ60cm）が検出され、水の溜りの根跡がみられたため泉のようなものであったと推定される。その他に8号住居址と9号住居址の間にある土壙（SK－1・規模1×0.9・深さ30cm）は袋状を程し、内部より土器片と炭が出土した。外部の貯蔵穴の可能性がある。

3.小　結

中臣遺跡で発見された住居址の中では、今回の調査が最南端であり、集落の広がり及び水田跡・墓域を含めて、中臣遺跡の全貌が明らかになりつつある。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居址10軒と、それにともなう溝と土壙が検出された。調査地は旧安祥寺川に20mと接近しているのであるが、河川の影響はまったく認められなかった。

Ⅲ　21次調査（図版十～十二－１－二十一）

１　調査経過

椥辻番所ケ口町26、27番地にあたる。栗栖野丘陵から山科川に向う低位段丘上に立地する。現状は水田である。調査区西側および南側は1978年度土地区画整理事業に伴ない発掘調査を実施した市街化道路23号線、24号線がある。調査区南に接する市街化道路24号線では、調査区に接してカマドを有する竪穴住居址１戸が検出されている。また調査区東北に位置する市街化道路27号線（1977年度調査）では縄文時代中・後期の遺物包含層を確認しており、今回調査地点においても縄文時代の遺構・包含層が検出される可能性があった。

調査は対象面積 888㎡ の内 650㎡ を調査実施した。調査区内には８ｍ×８ｍのグリッドを設定し、土層観察・遺物取り上げのためセクションを残した。調査区の現水田面は西側で29.47ｍを測り、東側は一段低くなっており29.16ｍである。基本層位は耕土、床土下に黒褐色混礫泥砂層が10cmから25cmの厚土で堆積しており、その下に黄褐色粘土が認められる。調査区北東地区では、黒褐色混礫泥砂の下に黒色泥土が堆積しており、黒色泥土下に黄褐色粘土または、黄褐色砂礫が堆積している。黒褐色混礫泥砂層は平安時代から弥生時代終末までの遺物を含む包含層であり、北側でうすく、南に向って厚く堆積している。北東区で検出された黒色泥土層は、現水田面の一段低い地帯にのみ堆積しており少量の弥生Ⅱ様式、縄文晩期、後期の土器片を出土している。遺構は黒色泥土層および地山と考えられる黄褐色粘土層を切り込んで成立している。

主な遺構は、堀立柱建物３棟、竪穴住居址３戸、溝状遺構10本、土壙、柱穴状ピットなどである。遺構は調査区南側に集中して検出されており、東部・北部では、ほとんど検出されなかった。

２　遺構・遺物

―堀立柱建物―

ＳＢ－１

東西２間、南北３間以上の建物、柱間寸法は 240cm等間である。柱穴堀形は一辺60cmから70cmの方形を呈す。柱穴堀形からは平安時代前期の遺物が出土している。

ＳＢ－２

東西２間以上、南北３間の建物、柱間寸法は 210cm等間である。柱穴堀り方は径60cm前後の円形を呈す。ＳＢ－１同様平安時代前期の遺物を堀形から出土している。

ＳＢ－３

東西２間、南北３間の南北建物、方向は西に振れる。柱間寸法は 150cm等間である。柱穴のうち、11号竪穴住居址の床面下から確認されるものがあり、古墳時代後期の時期に比定される11号住居址と同時期かそれよりも古い時期に比定される。柱穴堀形からの出土遺物は、古墳時代後期の土師器、須恵器片が少量出土している。

－11号住居址－　　(図版十一－２)

一辺約５ｍの方形を呈す竪穴住居址である。東南コーナー部は現代の野つぼに壊されているが全堀。柱間 250cmで４基の柱穴を有している。北側は比較的残りが良く確認面から15cmの深さを測るが南に向って削平されており、南壁はほとんど確認できず壁溝のみを検出している。北壁中央やや東よりにカマドを有すが残存状況はあまり良くない。

出土遺物は少なく、カマド周辺および南側壁溝内に集中して出している。古墳時代後期に比定される土師器・カメ、須恵器・杯などである。

－12号住居址－

調査区南端で検出された。北西コーナー部および北東側壁に付くと考えられるカマドを調査。部分調査ではあるが残りは比較的良好で、検出面より20cmの深さを測る。カマド周辺部の貼床は硬くしまっている。壁溝は幅20cm、深さ15cmを測る。出土遺物は少なく、古墳時代後期の土師器、須恵器の小片が出土している。

－13号住居址－　　(図版十二－１・二十一)

径８ｍの円形住居址である。ほとんど削平されており壁溝および柱穴のみを確認するにとどまった。また中央部は古墳時代溝、ＳＢ－２などの堀立柱建物柱穴に切られている。床面貼床はまったく検出されていない。柱穴は４基確認されているが、それ以上の柱穴が建つと考えられる。中央部に上段一辺 110cmの方形、下段径70cmの円形プランを呈す堀り込みが確認された。埋土は黒色の泥土層であり、遺物はまったく含んでいない。これまでの中臣遺跡の調査で確認されている円形住居址では同様のプランを持つ堀り込みが確認されている。出土遺物は非常に少ないが、弥生Ｖ様式に比定されるカメが一点出土している。

－その他の遺構・遺物－

調査区を北東から南西に向けて一条の溝が検出された。この溝は1978年度調査土地区画整理市街化道路23号線で検出された溝の続きと考えられる。幅90cm、深さ70cmを測る「Ｕ」字溝である。溝内からの出土遺物は極めて少なく時期決定しにくいが平安時代の建物であるＳＢ－１に切られ、古墳時代後期に比定される11号住居址を切っていることから、古

墳時代後期から平安時代前期の間にできたものと考えられる。

他の遺構としては性格不明の柱穴状ピット、土壙などが検出されている。また、調査区北側では良好な平安時代前期の包含層が検出されている。現地形で水田が一段下る所にあたり、本来溝などの遺構に伴なうものか単なる包含層となるのかは定かでない。出土遺物はこの調査区での大半を占め、土師器坏・皿・高坏、黒色土器・埦、須恵器・坏・埦、などが出土している。

3　小結

当該地付近では、前年度建設省国庫補助事業により、土地区画整理市街化道路23、24、25号線の調査を実施している。それらの調査成果では、当該地区南側の地区より、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居址・堀立柱建物などの遺構が検出され、多量の遺物も出土している。これら前年度までの調査成果から今次調査区においても同様な遺構のひろがりを推定したが、検出された遺構・遺物は、縄文時代から平安時代に至るまでの長期にわたるものであった。特に、前年度までの調査では、遺物の出土のみで遺構としてとらえることのできなかった弥生時代後期の竪穴住居址が検出されたことは、同時期の集落が確実に栗栖野丘陵の東、山科川沿いにまで広がっていることを示しており意義は大きい。

また、平安時代前期に比定されると考えられる堀立柱建物も検出されている。これまでの調査によって検出されている平安時代の遺構は、すべて平安時代前期に比定され、中臣遺跡内での当該時期における小単位での遺構群を追求することも可能となった。

Ⅳ　22次調査

1　調査経過　　(図版二・二十二)

中臣遺跡は、南北方向約2km、東西方向1.5kmの範囲に画された所で、中央部は、栗栖野台地の竹林と畑地になっている。この台地上には、現在坂上田村麻呂の墓所と、観修小学校があって、地図上の目標となっている。調査地はこの観修校の西50mの所にあって宅地予定地で、旧状は水田であった。このあたりの地目は、マンション及び木造立売住宅が主で、市街化区域でもあって急速な宅地化が進んでいる所である。地目の現状は、水田と畑地が入り混じっている。

トレンチは、A．B．C．Dの4つを設定し、敷地内で土砂を処置する必要上、A．Bトレンチより始め、終了後、機械力で反転、調査を行なった。調査地は、区画整理された直後でAトレンチの中央に南北に等高線が走っており、古い地形図を見れば、水田の畦と

なっているのがよく分る。発掘は層序に従って、耕作土、床土、黒ボク土、褐色粘土と進み、床土にのみ遺物が混入して他は一切それを認めることはできなかった。この状態は、C．Pトレンチにおいても同様で変化することがなかった。ただ褐色粘土上面には多くの樹木が繁茂していた跡が発見された。

2　遺構・遺物

当該地南約50mの地点において、古墳時代後期の土壙が検出され、また、西約20mの地点でも同時期の竪穴住居址が検出されている。(1974年度、土地区画整理市街化道路11号線12号線、京都市年次報告1974年) しかし今次調査区は上記したように西に向かって傾斜しており、遺構は検出されなかった。

3　小結

結果は、水田化の遅れた土壌として、黒ボク土が発達しており、古くは、薮か、雑木林で、畑地の開拓より水田となったと思われる。又水田とするために東の土を西へ移動させて棚田としていること、漏水を防ぐため床がためもなされたと考えてよい。その際、若干の遺構が破壊されたと思われる。

V　24次調査 (図版十二－2・図1)

1　調査経過

西金ケ崎22－4にあたる。現状は水田であり、栗栖野丘陵から旧安祥寺川に至る低位段丘の最っとも低い地点である。附近では、土地区画整理市街化道路4号線が北に接しており (1976年度第7次調査)、その北側には1978年度調査地点 (第12次、18次) が存在する。これら前年度までの調査成果では、比較的遺構は検出されていない。しかし本調査区南西では「方形周溝墓」と考えられる遺構が検出されており (1976年度第7次調査、1978年度15次調査)、集落と墓域との境にあたることから本調査地点の成果が注目された。しかし調査の結果、土地区画整理施行以前の耕土下は地山と思われる黄褐色砂礫となり、遺構と思われるものはまったく確認できなかった。遺物も少なく、耕土、旧耕土中より小量の古墳時代土師器、須恵器が出土したのみである。

2　小結

以上のことのように当調査区では、まったく遺構は検出されなかった。周辺地区も含めて中臣遺跡の中では空白地帯である。

Ⅵ　25次調査 (図版十三－1・二十)

1　調査経過

椥ノ辻番所ケ口町49の1にあたる。調査区の東に接して土地区画整理市街化道路27号線(1977年度10次調査) があり、その東は山科川となる。調査区は水田であったが土地区画整理に伴い宅地となっており、すでに、壁が施され、約2ｍの盛土も行なわれていた。そのため調査対象面積91．54㎡のうち調査可能地区は、建物の建築面積である47．19㎡に限られた。また2ｍの盛土が行なわれているため仮住居の擁護を考慮し、実質調査面積は約20㎡であった。

東に接する市街化道路27号線の調査では縄文時代後期、中期の遺物が出土しており、中臣遺跡の中であまり明確となっていない縄文時代の遺構が検出される可能性があった。

2　遺構・遺物

調査の結果、当地盛土擁壁工事の際すでに耕土を除去しており、遺物包含層である黒灰色砂泥層直上まで削平されていた。遺物包含層は二面確認されている。上層が黒灰色砂泥層、下層が黒色砂泥層である。二層共に、弥生Ⅱ様式、縄文晩期、後期の遺物が出土しており、下層黒色砂泥層からは、縄文中期の遺物も出土している。遺構は、黒灰色泥砂層から切り込むものはなく、黒色砂泥層または地山である黄褐色粘土層を切り込んで成立している。これらの遺構は、土壙、柱穴状ピットのプランを呈しているが性格は不明である。遺構からの出土遺物も少ない。

出土遺物には、弥生Ⅱ様式のカメ片、縄文時代のカメ・ハチなどの器形になると思われる土器片が出土している。他に黒色砂泥層より、石鏃が1点出土。

3　小結

本地点の調査では、縄文時代後・晩期・弥生時代の遺物が出土している。しかし、当該時期に供なうと考えられる遺構は検出されていない。検出されたピット、土壙は小範囲であるため性格は不明であるが、本来上層にあったと考えられる古墳時代以降の柱穴、土壙などであろうと考えられる。

Ⅶ　26次調査 (図版十三－2・二十)

1　調査経過

椥ノ辻番所ケ口町20に所在。現状は水田である。北に接する土地区画整理市街化道路24号

線（1978年度調査）の調査では、耕土下に砂礫層の堆積が認められ、東側約20mを南北に流れる山科川による氾濫のものと考えられる。

2　遺構・遺物

調査トレンチは7m×26mと南北に長いトレンチを設定して行なった。トレンチ北部では耕土直下に砂礫層が検出され、市街地道路24号線と同様な状況を示している。南部では暗黄褐色泥土が検出される。この層からは縄文後期と考えられる土器片が出土したが量は少ない。遺構となるようなものは検出されなかった。

3　小結

暗黄褐色泥土層の堆積はブロック的であり、山科川の氾濫によるものと考えられる。

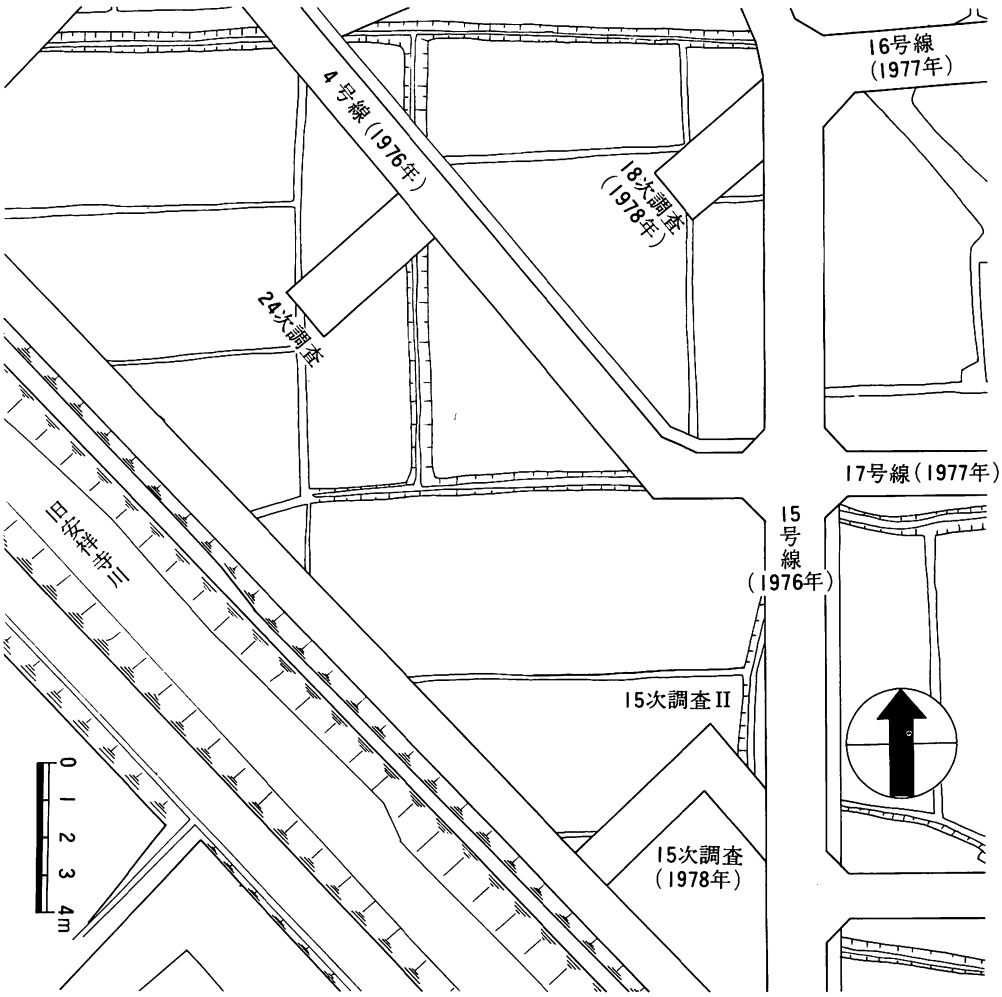


図1　15次Ⅱ・24次・調査区

Ⅷ　28次調査（図版十四・二十三・二十四・図2）

1　調査経過

現在の旧安祥地川の50m北に離れた部分で、遺跡全体の南西端に当っていると言える。丘陵より南に下って完全に水田化した所で、グライ化した水田土壌はせいぜい50cm～30cmしか発達しておらず、停滞水型の土壌の発達が悪いことを示している。そこに若干のグライ化を認めるのは、旧安祥寺川が改修される以前にたびたび冠水したと聞く所より、小地域の湿田化があったためであろう。現在は、区画整理も完了して宅地になりつつある所で近郊農業がよく発達しているが近い未来には家々が甍を並べる所になろう。

2　遺構・遺物

グリットを2ケ所設定し、南、北の2グリットとした。層序は比較的単純で、第1層は、耕土で、部分的に2面を数える。第2層は床土、第3層は暗褐色砂泥で少量の遺物が存在している。第4層は灰褐色泥土でこれを切って住居址やＳＤ01、小ピット、土壙が存在していた。まず、両グリッドにまたがって住居址14号が発見された。これをまとめると、南北方向4.4m、東西方向4.7mの隅丸方形の竪穴住居でカマドが北に付設されている。住居址の床面までの深さは約30cmあった。少なくとも住居址は、2度の改変が行なわれて、床面が修復されていた。と言うのも最初南側にあった貯蔵穴を埋め2cmばかりの黄色粘土を張った後、北にカマドと貯蔵穴を作り変えているからである。又カマド内は、土師器の甕を逆にふせ柱としており、煮たき用のカメもそのまま埋没していた、遺物は、カマドの中に甕、右側に高杯の杯部のみ、左にある第2貯蔵穴内に、須恵器の杯身と甕がかさなって、他は、黄色粘土の修復の下より土師器の甕片が見られた。又両グリットにまたがって南北にのびる（ＳＤ01）溝を一本発見しており幅約50cm～90cmで深さ20cm～30cmで少量の遺物を含み、住居址と同一面で発見している。他にこの地区は、意味不明の不定形ピットが見られる所より、多くの樹木が繁茂していた跡であると考えた。

3　小結

土壌的な面より考えてみると、弥生時代から、古墳時代より排水主体の水田はかぎられた地域でしか面積を獲得できず、灌漑手段を加味しなければ耕地を拡大できなかったと思われる。それは、中臣遺跡の28次部分や20次部分でのグライ化した土壌の未発達が物語っている事業であろう。このことからやや広い谷水田の開発へと進んだものと思われる。それは山科盆地は周囲の山々よりの豊な水量を得ることができる好状件下にあったことより

うなずけることができ、池が発達していないことがこれを裏付けている。特に中臣遺跡は、山科盆地の水量を一手に集めた場所に位置して、水路さえ造れば、たちまち水田化が可能になったのである。そのため縄文時代より平安時代に至る各時代に人々は定住して拠点的集落を営み続けたものと言え、各期の遺構を発見できたのである。今回の調査は、集落を考える上では小さな発見であったが、遺構の重なりが少ない点より中心は、東北方向の丘陵周辺ではないかと考えられる。

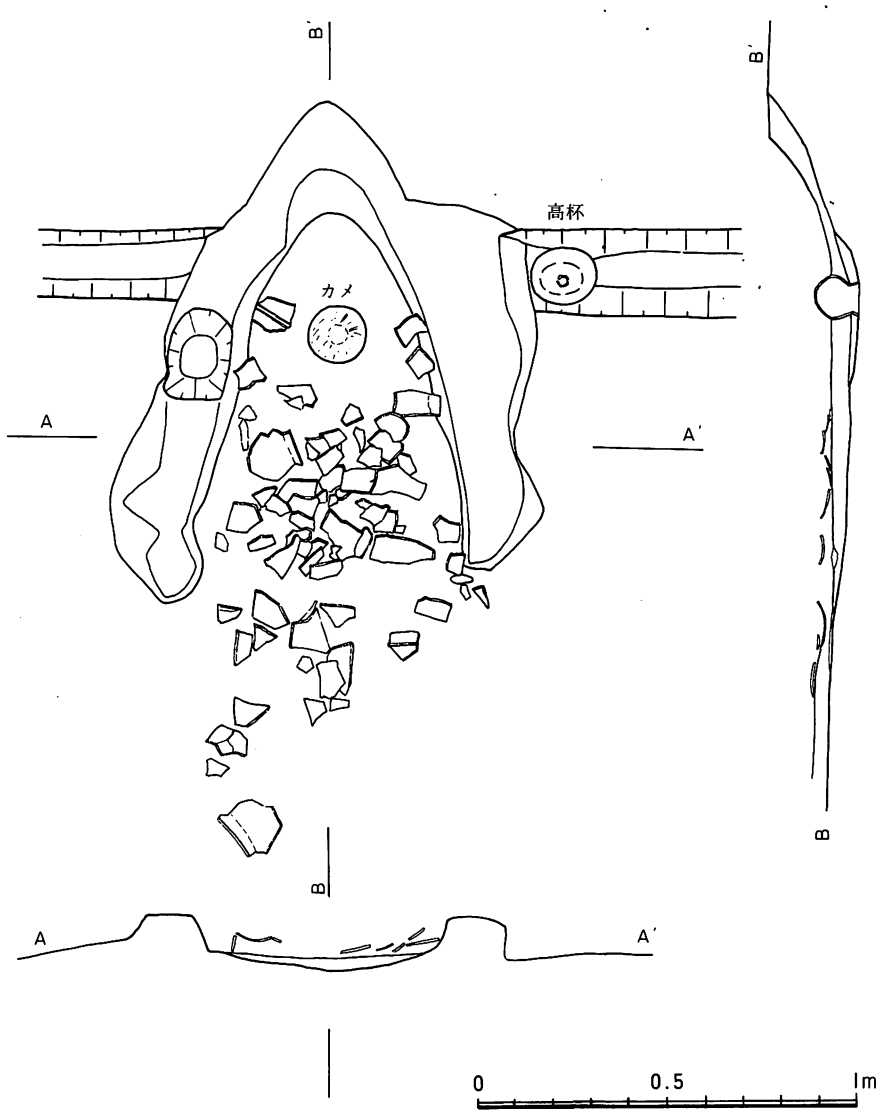


図2　14号住居址カマド

Ⅸ　32次調査（図版十五・図3）

1　調査径過

調査地点は椥ノ辻番所ケ口町27にあたり、栗栖野台地と山科川に囲まれた平坦面に位置する。当該地周辺はかって水田として利用されていたが、現在ではすでに北側は宅地化され（1979年度第21次調査）、また周辺には土地区画整理道路（1978年度第16次調査）が整備されている状況を呈している。当該地周辺のこれら一連の調査では、縄文～平安時代の遺構・遺物が多数検出されている。このうち、第21次調査では今回検出した柱穴群及び溝と密接な関連をもっと考えられる平安時代前期の堀立柱建物群が確認されている。

今回の調査は、当該地をすでに約3ｍの厚さで土盛しており、更に発掘区を隣接地との境界より約1.5mほど内側でしか設定できないという制約された条件の下で実施した。

トレンチは調査対象地のほぼ中央に12ｍ×3ｍで南北に設定した。基本層序は耕作土・床土が約40cmあり、以下暗茶褐色砂泥混礫層（厚さ約15cm）、黄褐色泥土層（厚さ20～40cm）、暗灰色砂礫層と順次堆積している。遺物包含層は暗茶褐色砂泥混礫層で土師器・須恵器の細片が少量出土している。黄褐色泥土層以下は無遺物層であり、地山と考えられる。尚、トレンチの中央より南側は水田耕作時に約50cmカットして一段低くしており、遺物包含層は削平されている。地山の黄褐色泥土層は断面観察の結果、その上面が北半分とほぼ同レベルであり、削平は受けなかったものと考えられる。

2　遺構・遺物

検出した遺構はトレンチの北半分にピット群、南半分に東西溝2（ＳＤ01・02）である。ピット群には暗茶褐色砂泥混礫層で検出したものと、黄褐色泥土層で検出したものがあり、大きく2時期に分けることができる。出土した遺物は土師器・須恵器の細片のみで厳密な時期決定は行なえないが、奈良時代と考えられるものが多い。これらの性格としては、根固め石をもつもの、一辺60～70cm前後で方形の堀形をもち、深さ40～60cmあるものなど、堀立柱建物の柱穴と考えられるものが大部分である。建物としてのまとまり等を追求することはトレンチを拡張するのが不可能な条件であったためできず、不明のまま調査を終了した。2条の東西溝は包含層がカットされているため、全て黄褐色泥土層で検出した。ＳＤ01は検出面で幅70～80cm、深さ25～30cmで断面は舟底形を呈している。覆土は暗茶褐色砂泥で、これから奈良時代の土師器・杯、須恵器・杯・甕が出土している。ＳＤ02は浅い舟底形を呈し、南側肩部は調査区外である。覆土はＳＤ01に類似し、これから奈良時代の土師

器・杯・甕，須恵器・杯・蓋・甕の小片が出土している。

3　小結

周辺の調査からみても、付近一帯に奈良～平安時代の集落が展開していると考えられる。

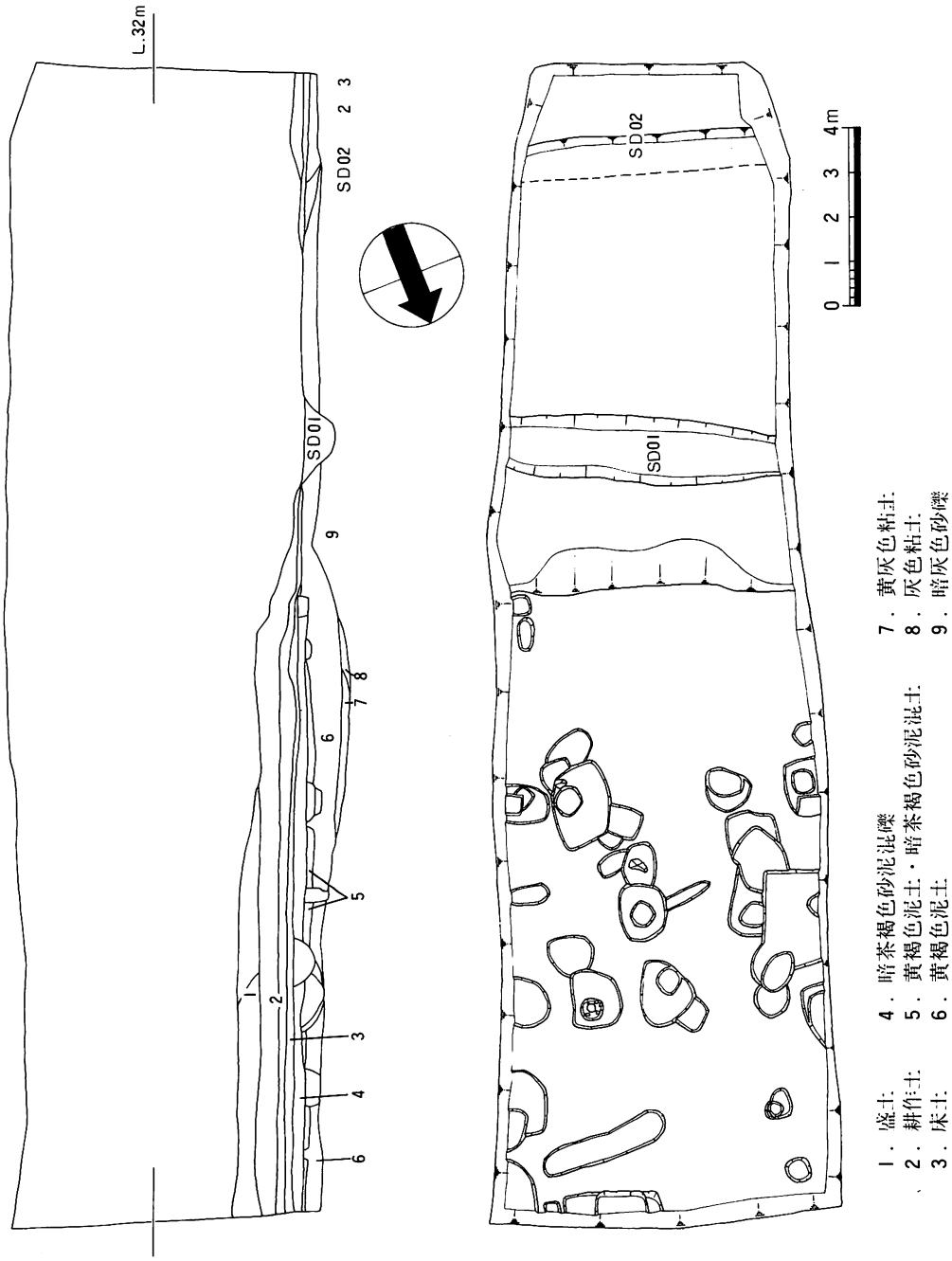


図３　32次調査　平面図・断面図

X　おわりに

本年度の調査成果をまとめると、遺構としては、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居址11戸、古墳時代後期竪穴住居址３戸、平安時代前期以前の掘立柱建物１軒、平安時代前期以降の掘立柱建物２軒、その他土壙、溝など多様の遺構が検出されている。また出土した遺物は縄文時代後期から平安時代前期までであり、断続的ではあるが各時代にわたって出土しており、中臣遺跡の性格をもっとも顕著にあらわした調査成果といえる。

第20次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される竪穴住居址、土壙、溝などが検出された。この時期の竪穴住居址、その他の遺構はこれまでの調査では道路敷地での検出が大半であり、いわば「線」の調査であった。今回「面」として住居址の広がりをとらえることができたことは、中臣遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落論において、単位集団にまでおよんで追研する資料となった。

第32次調査では、奈良時代に比定される柱穴、溝などが検出されている。1978年度調査では、調査区南に位置する土地区画整理道路より、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構、遺物が検出されている。当調査区北側に位置する第21次調査区では、奈良時代に比定される遺構、遺物は確認されておらず、また、東側に近接する第26次調査区でもまったく確認できなかった。奈良時代における遺構群は、土地区画整理24号線・25号線にはさまれた、栗栖野丘陵に接した地区にのみ分布するようである。中臣遺跡の中で第１の課題といえる「中臣氏」との関連を考えると当時期の遺構、遺物は重要な資料といえる。また、中臣遺跡の所存する山科の地に中臣鎌足が邸宅をかまえており、その子不比人も幼少の頃は山科で育っている。これらのことから、中臣遺跡における奈良、平安時代の遺構を「中臣氏」と関連して考えられるとともに、鎌足の邸宅の所存した「陶原」を栗栖野丘陵に求めることも可能となってきた。今後の資料の増加をまちたい。

昨年度で中臣遺跡内における土地区画整理事業はすべて終了している。それに伴ない、宅地化が進んでいるが、特に山科川に面した地区では、全面にわたって盛土を行ない、道路と同レベルにしている。したがって栗栖野丘陵との比高差は、ほとんどなくなっており、旧地形は、現状をとどめていない。今後、このような状況の中で、中臣遺跡の性格を明確にしてゆかねばならず、より精密な調査計画と技術を持って対応しなければならない。また遺跡の調査、保存とともに、遺跡を埋蔵する現地形の保存にも注意をはらわねばならない。

図　　版

1　航空写真（1977年撮影）

2　航空写真（1978年撮影）

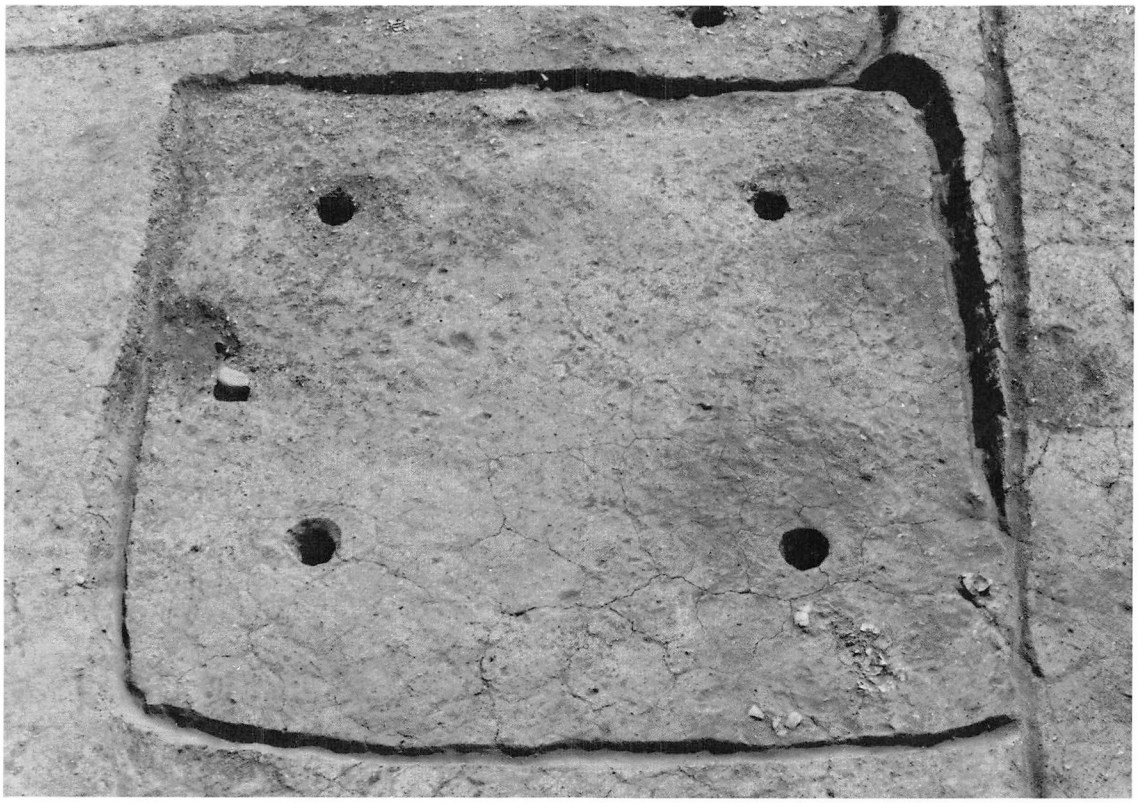
1　15次II調査区全景

2　22次調査区全景

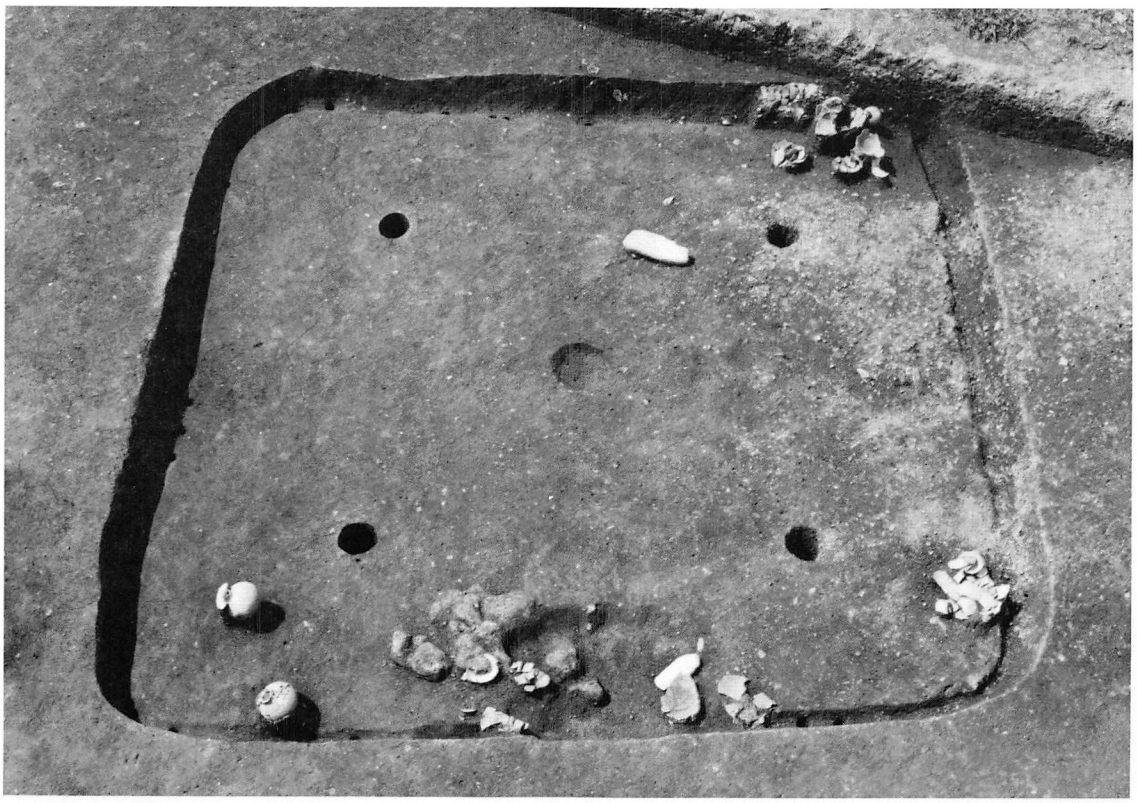
20次調査・西部住居址群

1　2号住居址

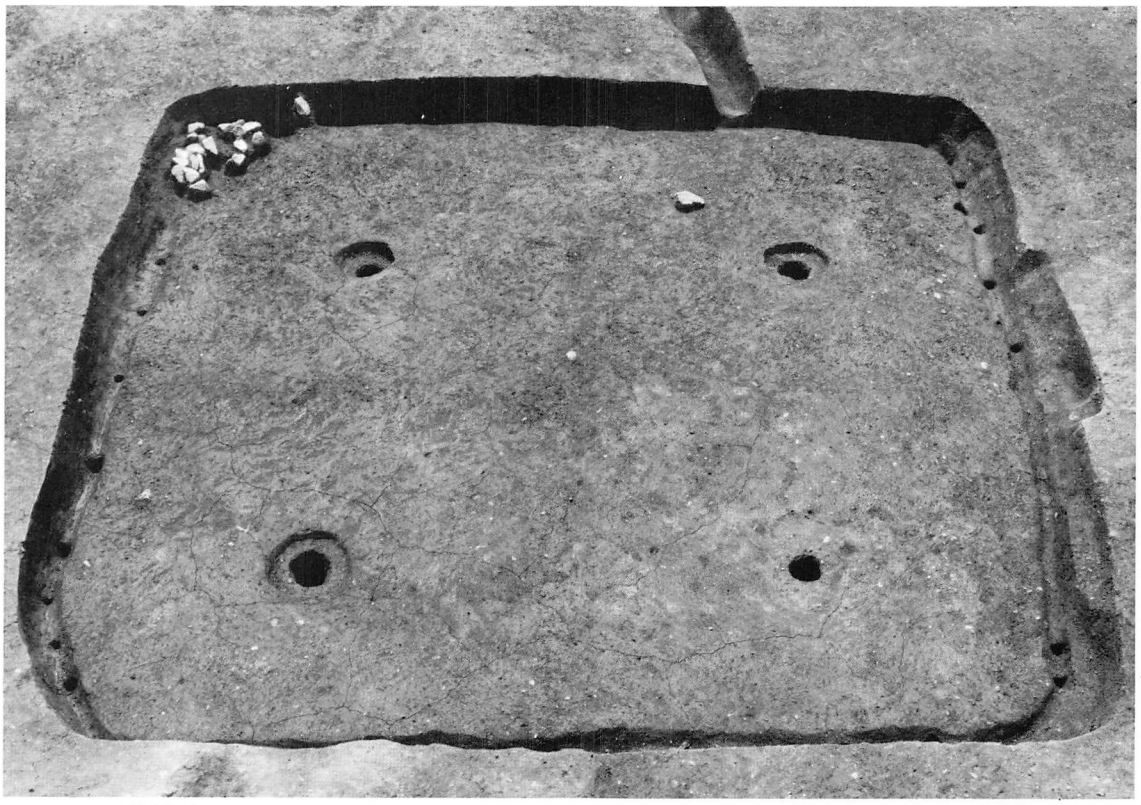
2　4・5・6号住居址切合状況



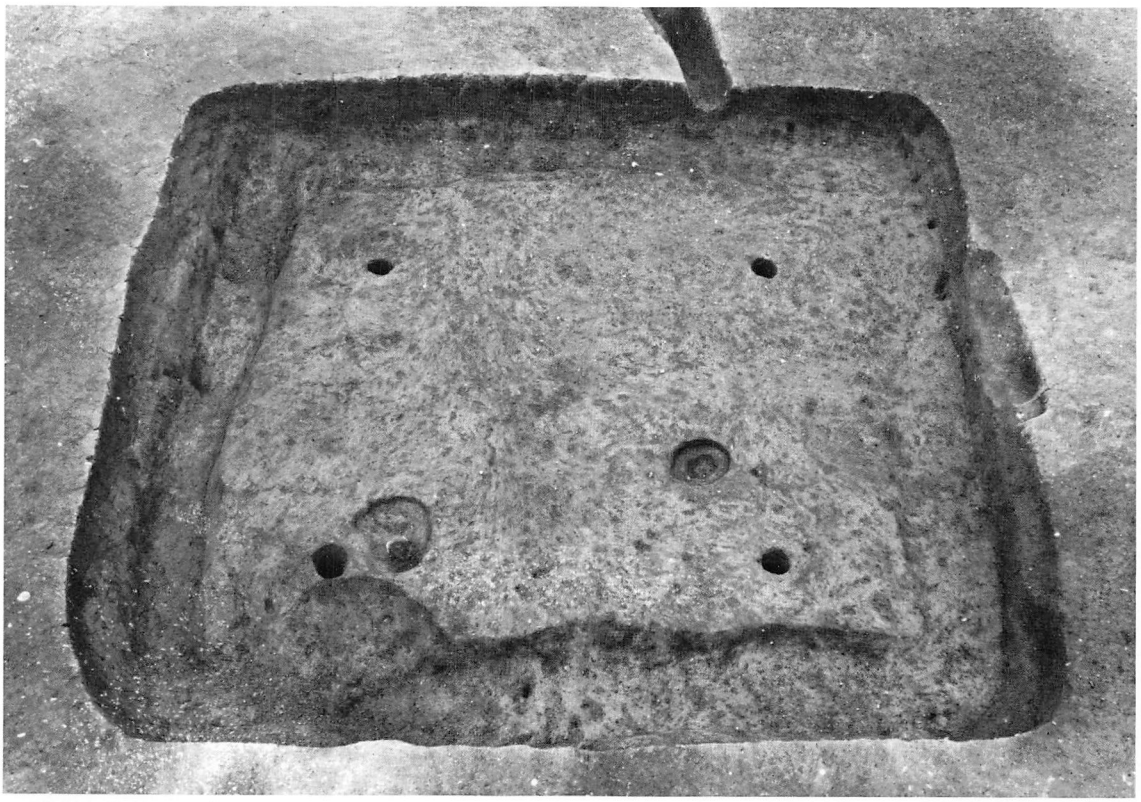
1　3号住居址



2　8号住居址

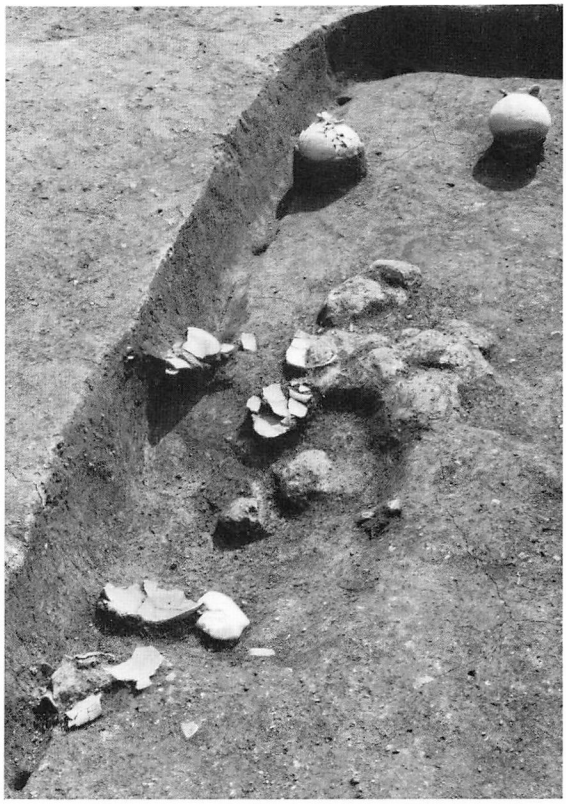


1　9号住居址

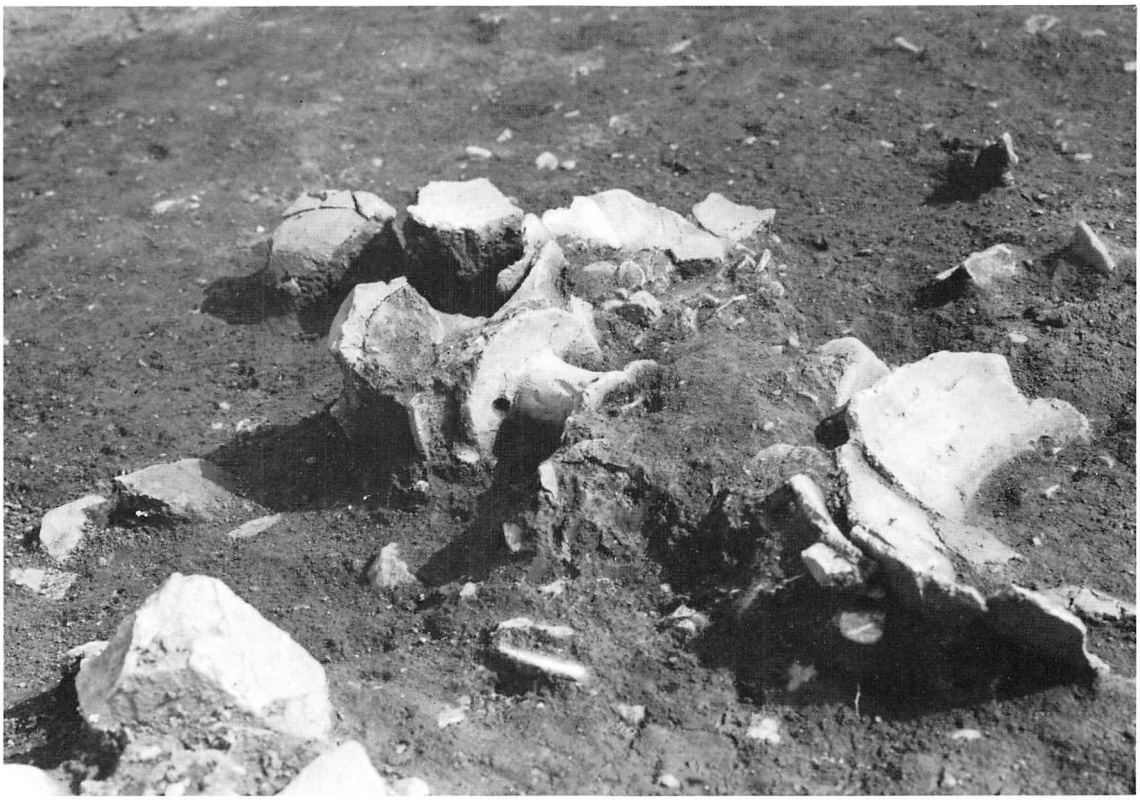


2　9号住居址完掘状況

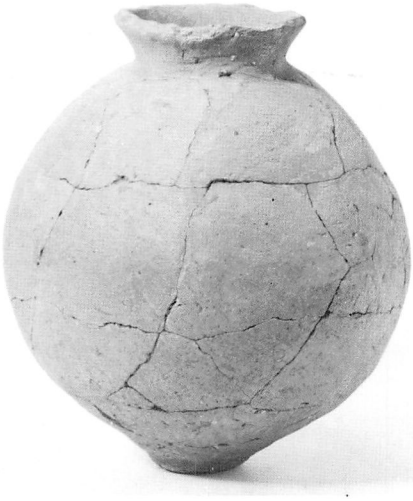
1　8号住居址土器出土状況



2　8号住居址貯蔵穴



3　10号住居址土器出土状況



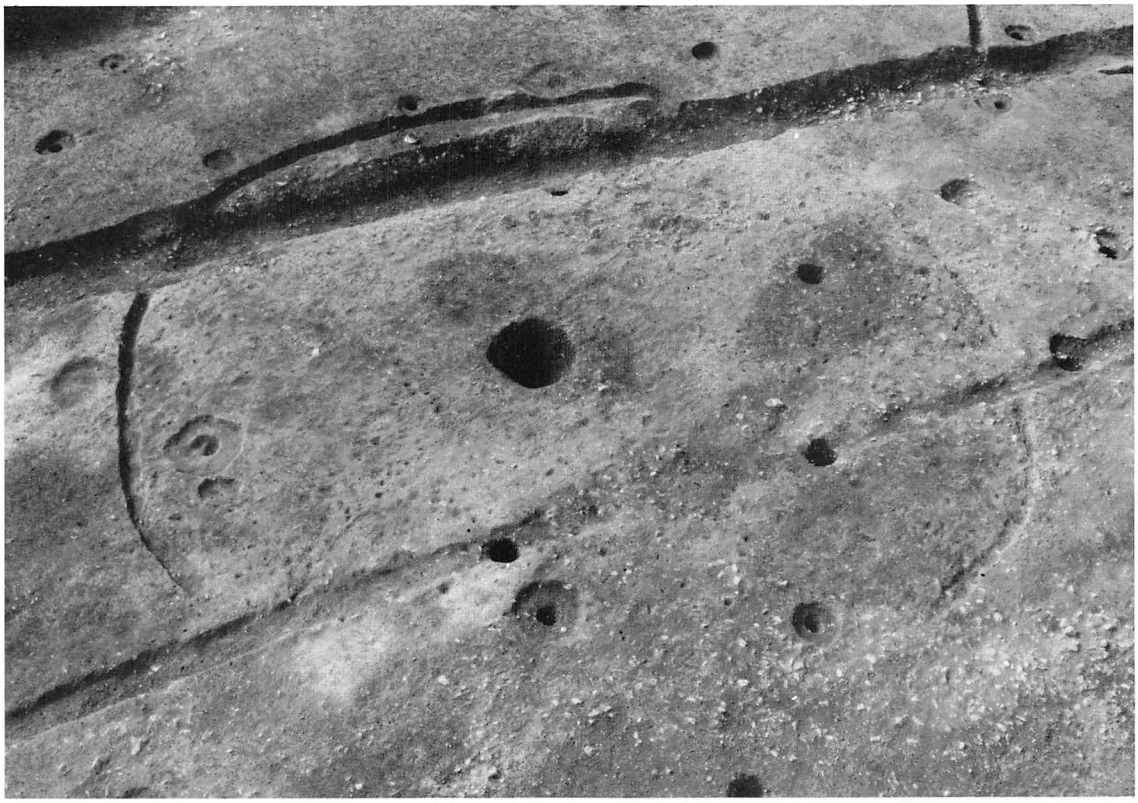
8 号住居址出土遺物

10号住居址出土遺物

21次調査区全景

1　21次調査区北壁断面

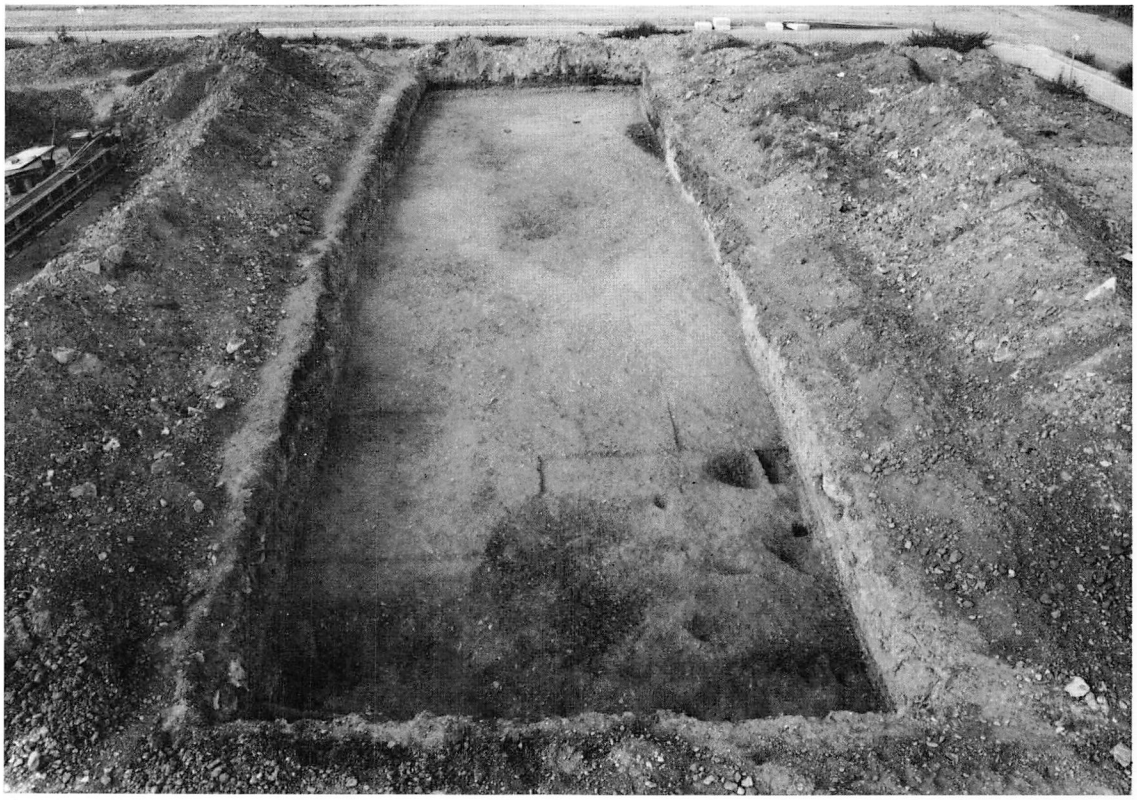
2　SB－3



1　13号住居址

2　24次調査区全景

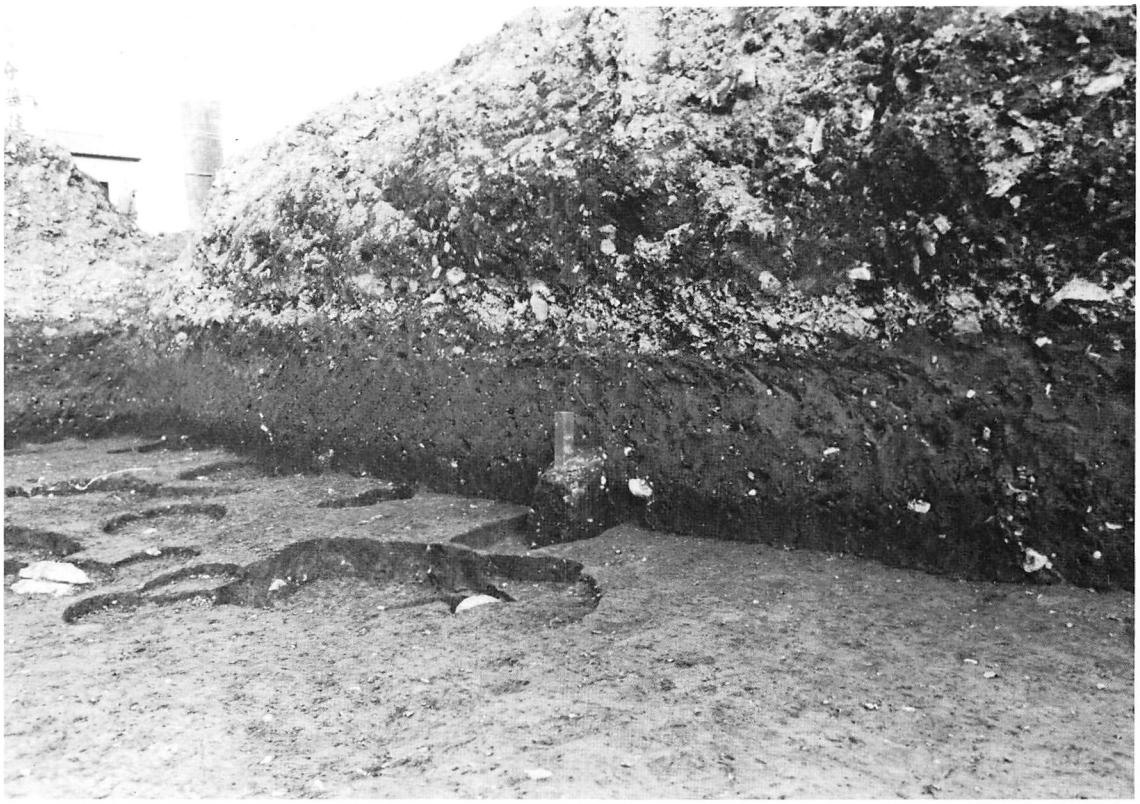
1　25次調査区全景



2　26次調査区全景

1　28次調査区全景

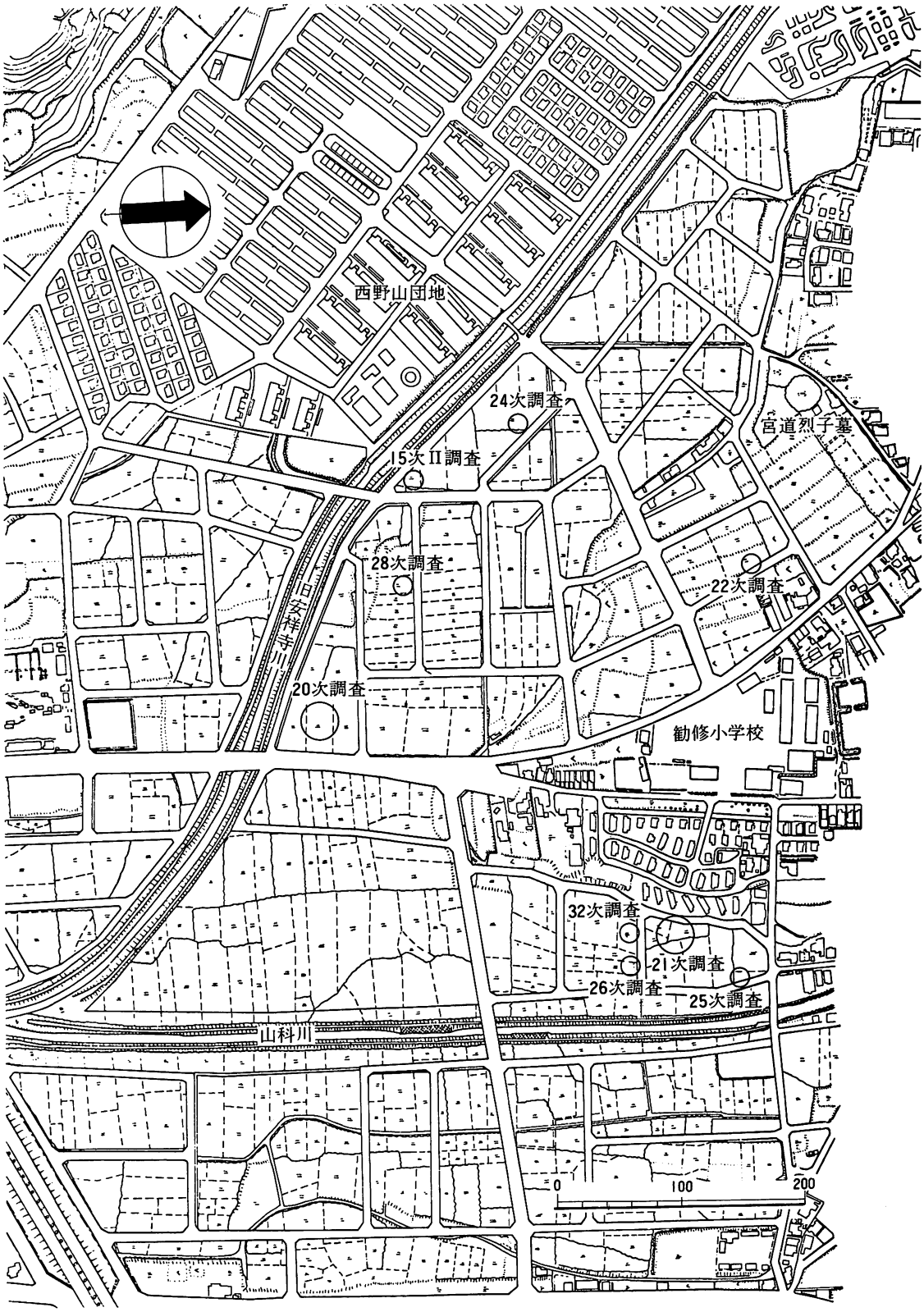
2　14号住居址カマド



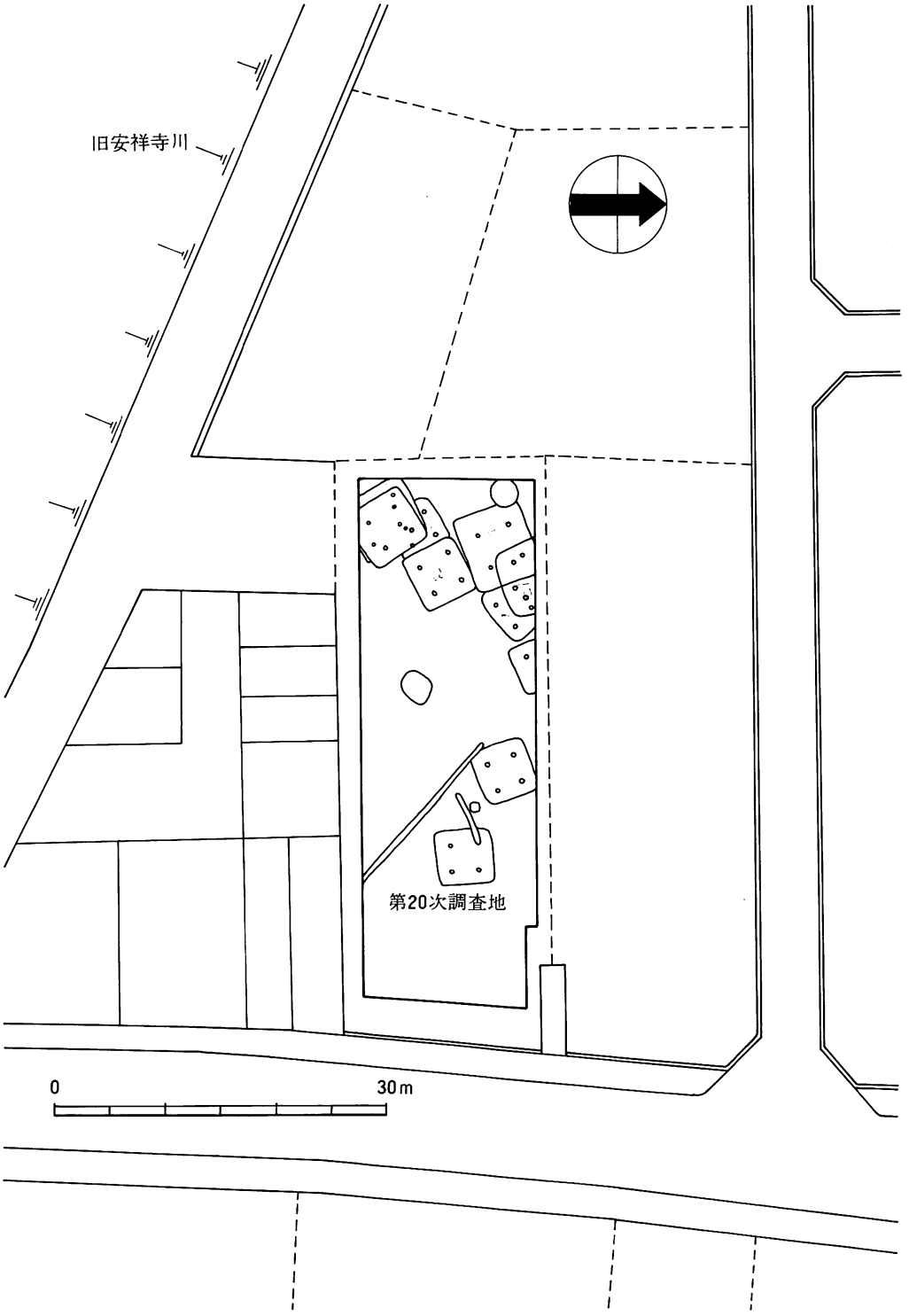
1　32次調査東壁断面

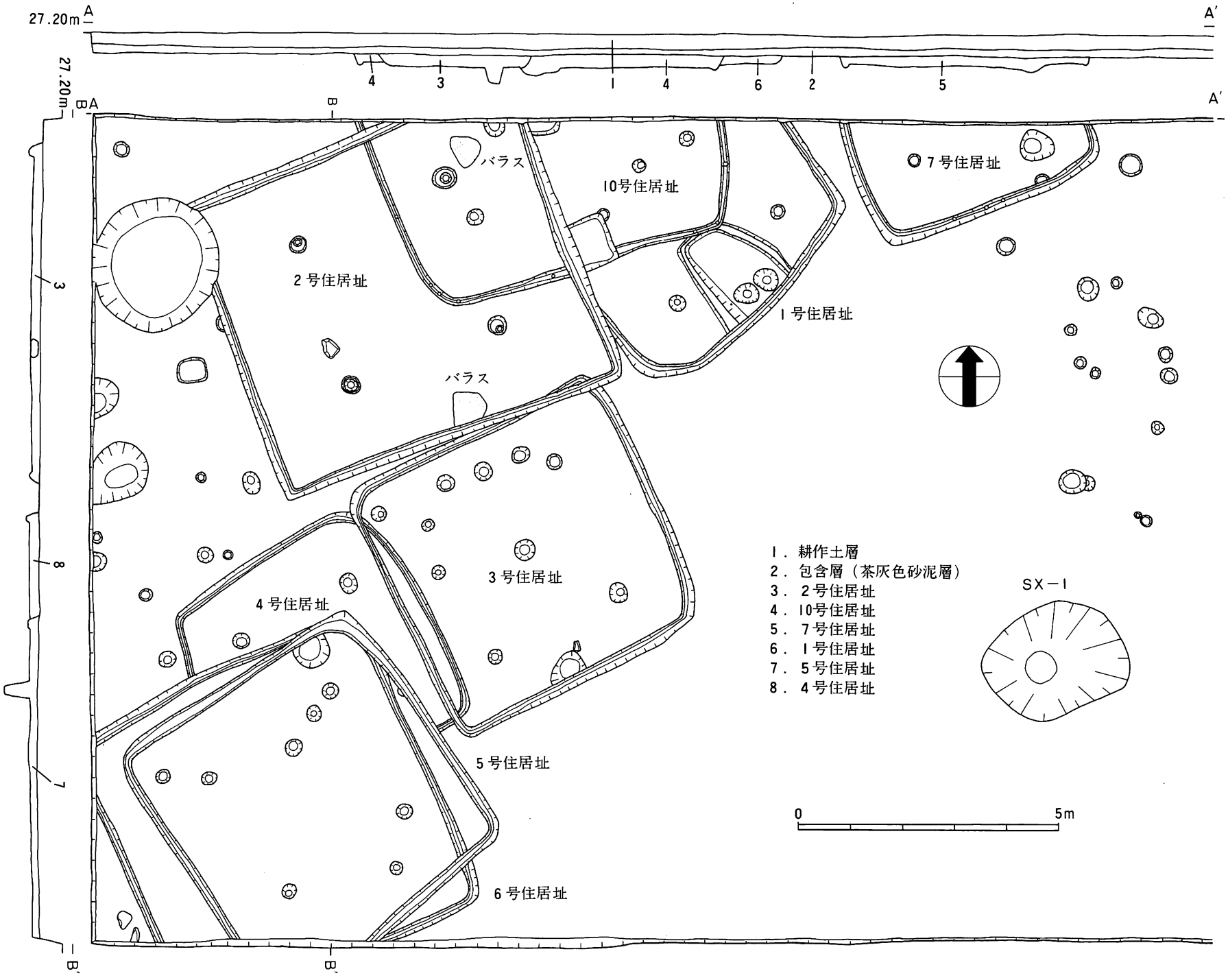
2　32次調査区全影

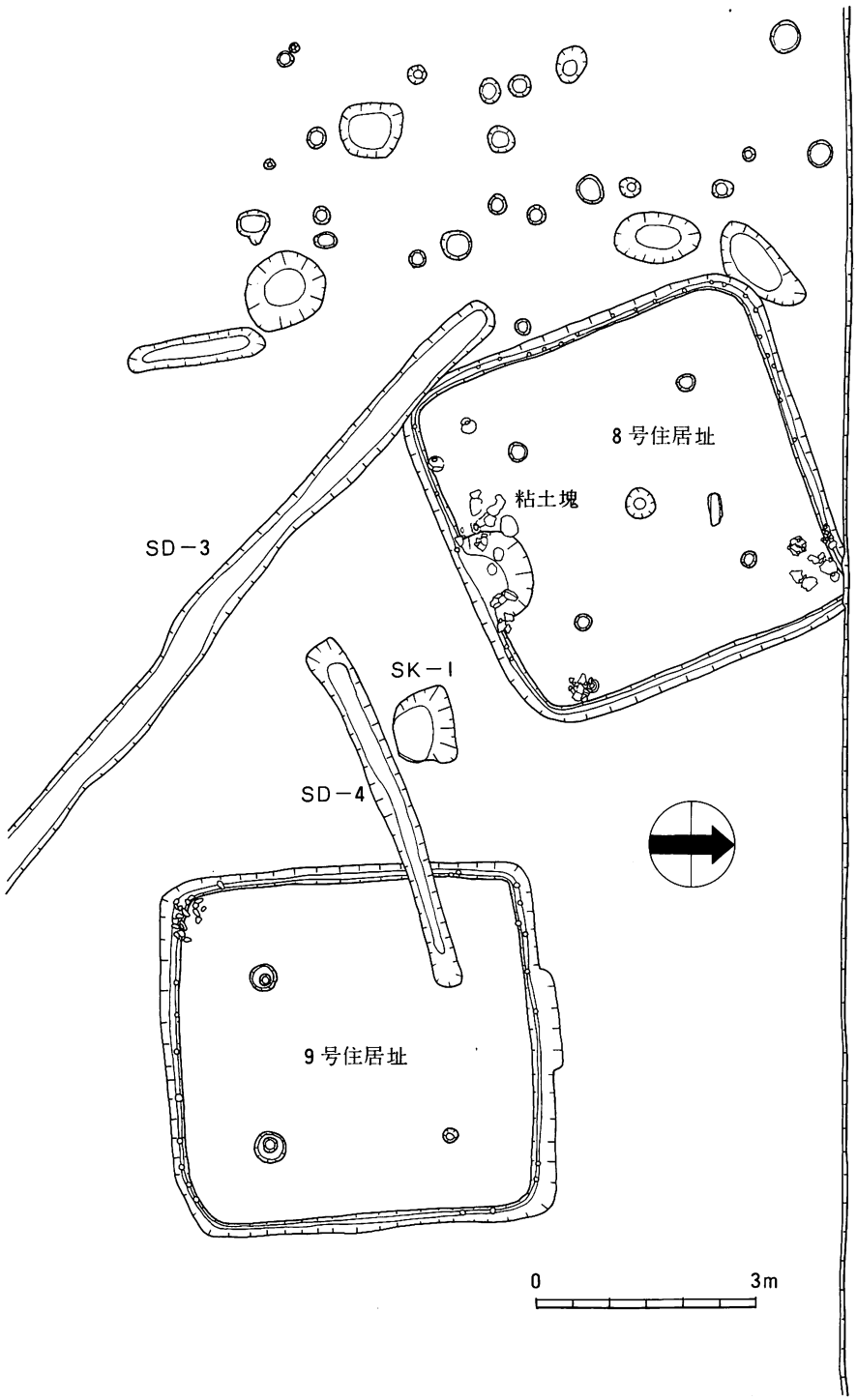
図版十六　遺跡　調査位置図



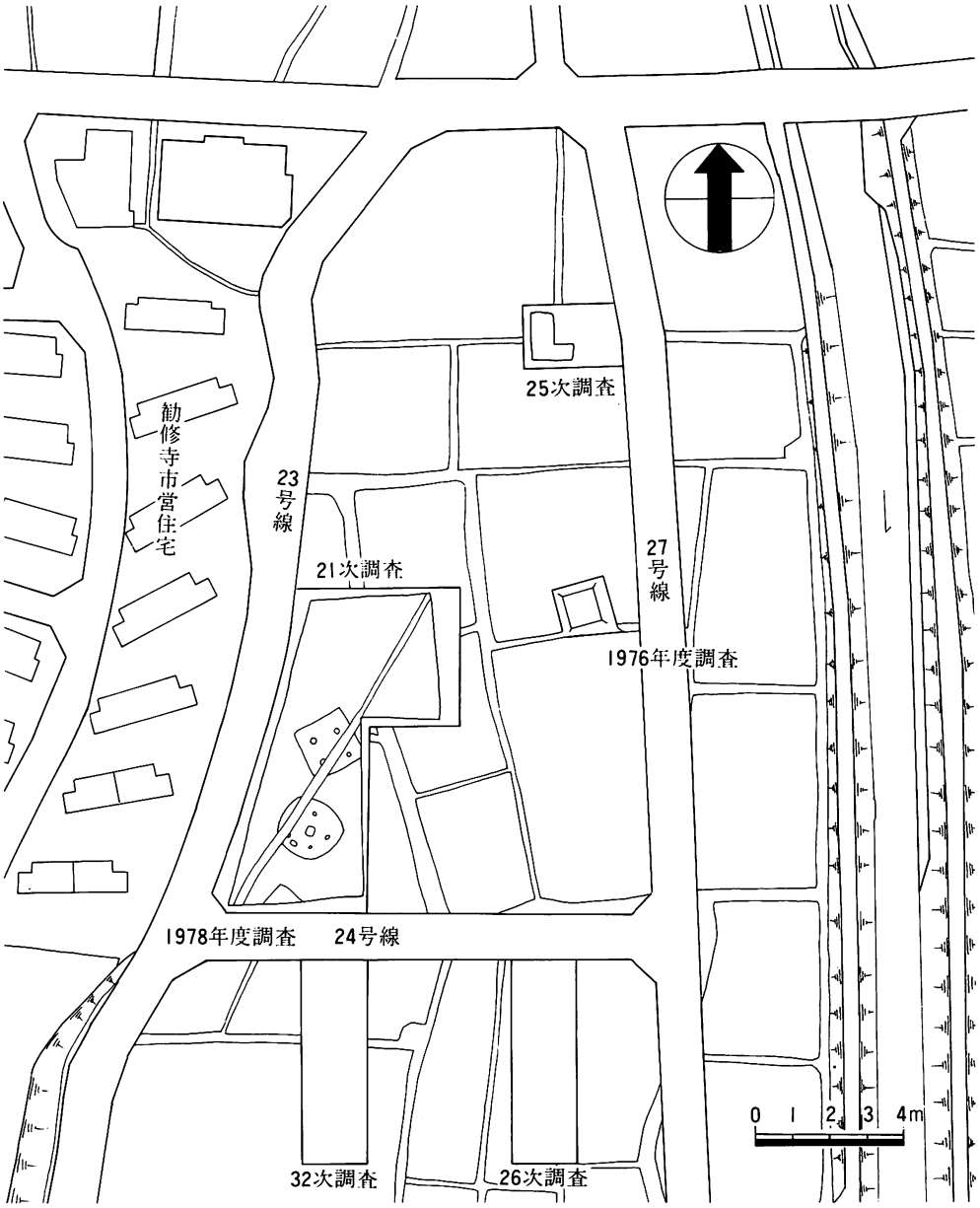
図版十七　遺跡　20次調査全体図




27.20m
A
A′
B
B′
4
3
1
4
6
2
5
7
8
バラス
10号住居址
7号住居址
2号住居址
1号住居址
バラス
3号住居址
4号住居址
5号住居址
6号住居址
1．耕作土層
2．包含層（茶灰色砂泥層）
3．2号住居址
4．10号住居址
5．7号住居址
6．1号住居址
7．5号住居址
8．4号住居址
SX－1
0
5m

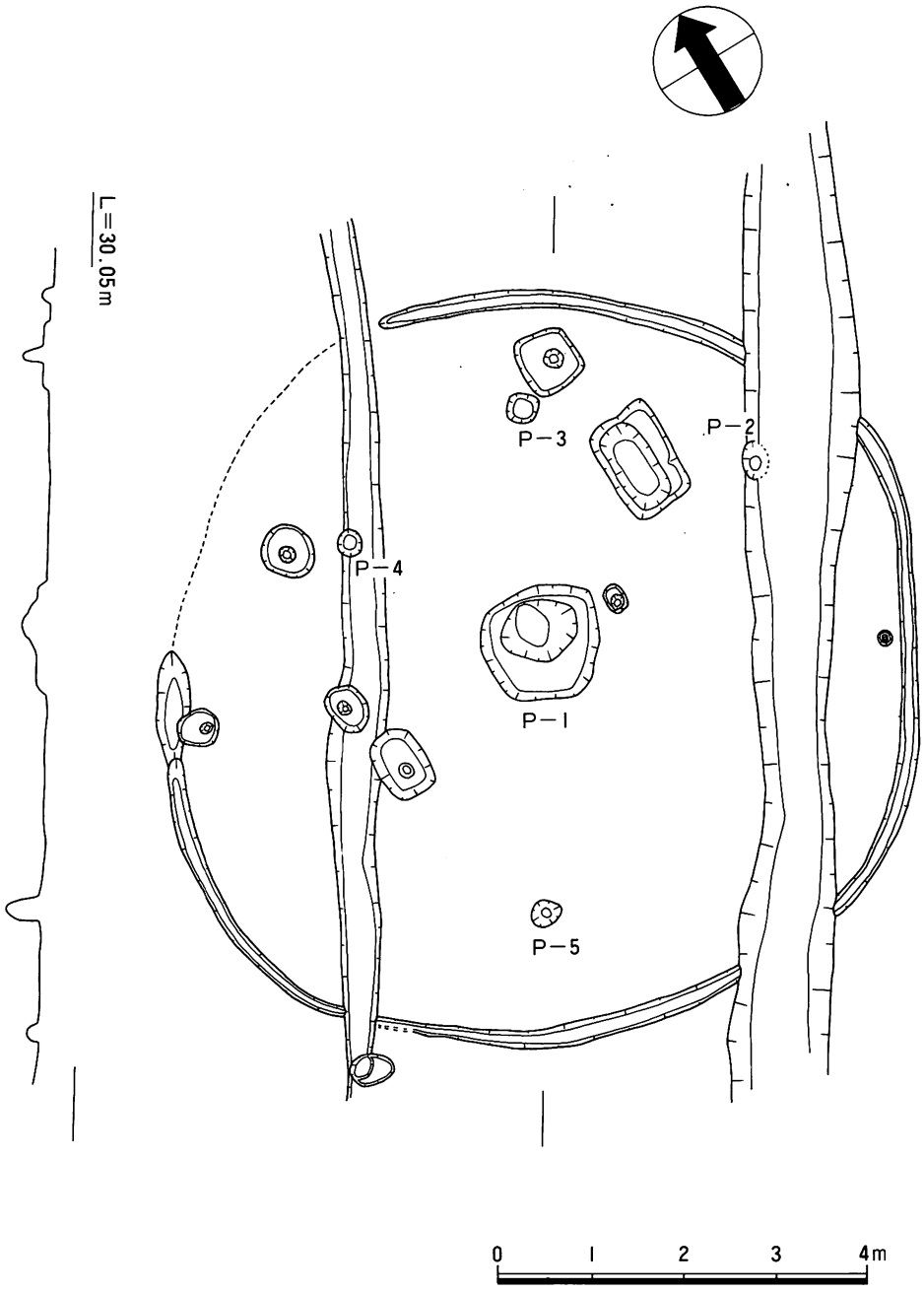

8号住居址
粘土塊
SD－3
SK－1
SD－4
9号住居址
0
3m

図版二十　遺跡　21次・25次・26次・32次調査区



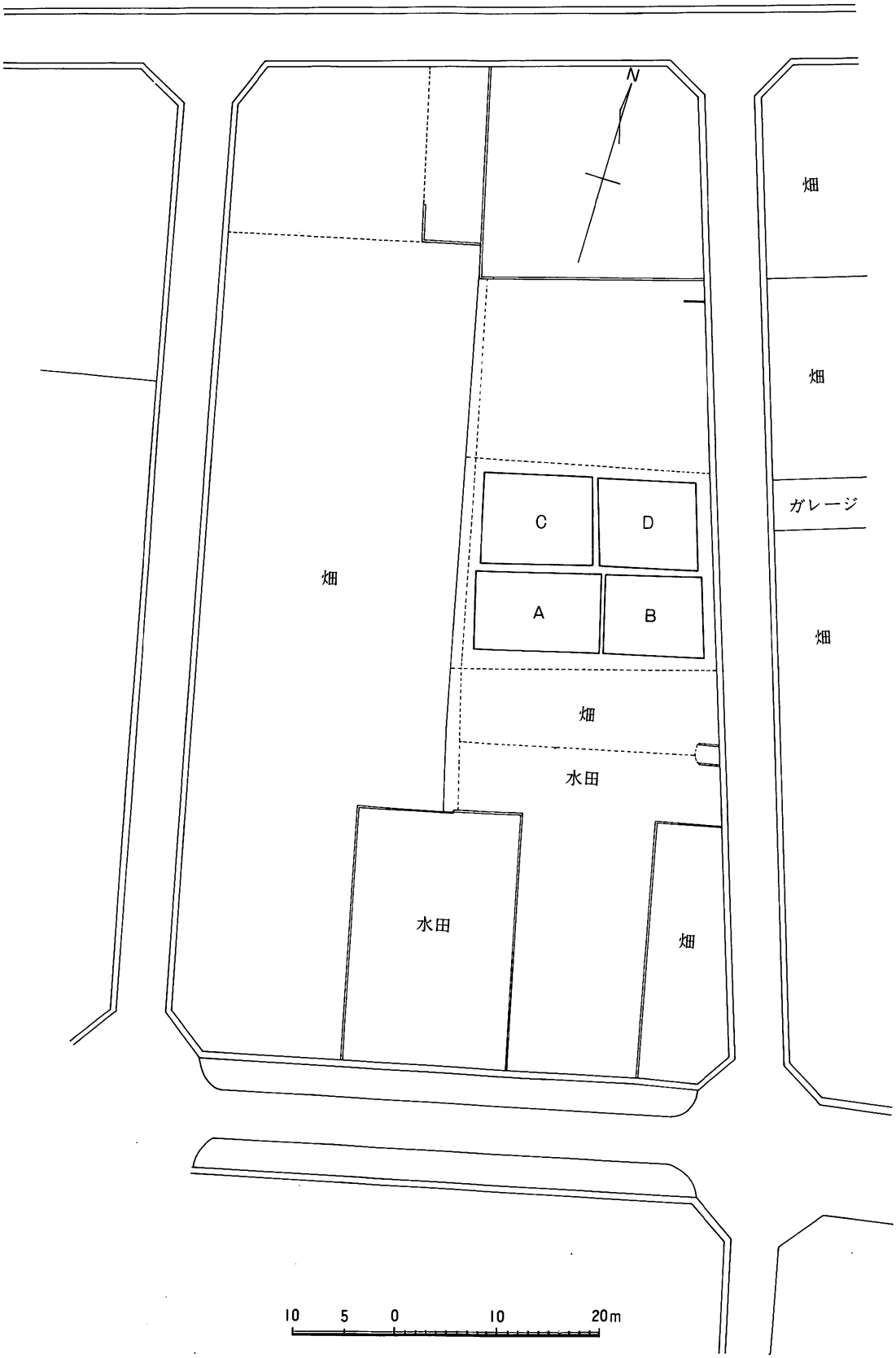
図版二十一　遺跡

21次調査13号住居址



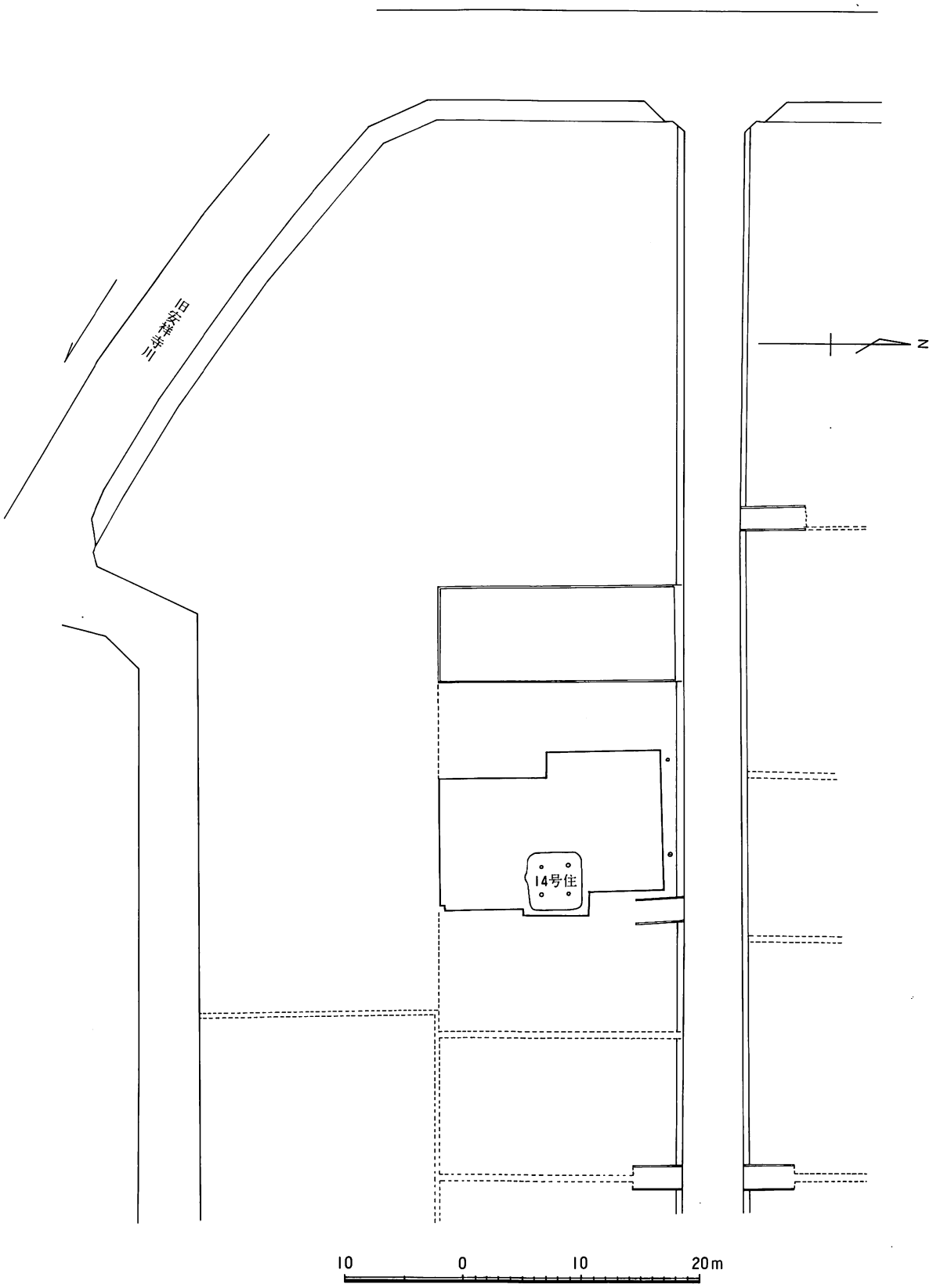
図版二十二　遺跡

22次調査区平板図



図版二十三　遺跡

28次調査区平板図



図版二十四　遺跡

28次調査区平面図

中　臣　遺　跡　(1979年)
文化庁国庫補助事業による
発掘調査の概要

1980年3月31日

調査主体
発　　行　京　都　市　文　化　観　光　局
編　　集　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

印　刷　真　陽　社

TEL (075)415－0521